

学生主体による学科・組織横断型 アカデミック・イベント創出プロジェクトの成果と課題 (1)

ウォント盛香織・岩崎佳孝・木下裕美子

Creation of Intradepartmental/Intrainstitutional Students-Centered Academic Events: Its Achievements and Problems (1)

MORI Want Kaori, IWASAKI Yoshitaka and KINOSHITA Yumiko

Abstract: This report discusses the achievements and problems of the students-centered academic event titled “Minority Women in North America: Indigenous Women and Japanese War Brides.” We will argue what students learnt and what kind of problems students faced in the process of making the event possible.

Key Words: Plan and Practice of students-centered academic event; Creation of Intradepartmental/Intrainstitutional project; research on minority women in North America; gender education; multicultural education

要旨: 本報告は、2019年度甲南女子大学教育イノベーション・プロジェクトに採択された「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」で行った「北米に生きるマイノリティ女性たち：先住民女性、そして日本人花嫁」というアカデミック・イベント開催に至るまでの、プロジェクト参加各ゼミでの学生の学習取り組みについて説明し、その成果ならびに課題を述べたものである。

キーワード: 学生主体のアカデミック・イベントの企画と実践、学科・組織横断型事業、北米マイノリティ女性研究、ジェンダー・多文化教育

研究の背景と目的

本報告は、2019年度甲南女子大学教育イノベーション・プロジェクトに採択された「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」の取り組みの成果ならびに課題を2回に渡って述べていくものである。

「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」は、学習プロジェクトとして、複数の目的があった。一点目は、学生が主体となり、アカデミック・イベントを企画、実施することで、学生の学びの理解や関心を深めることである。二点目は、本プロジェクトを通じて、学生が女性大学で学ぶ学生として、北米に生きる女性たちの生き方を知ることで、ジェンダー・多文化意識を高め、国際的な視野を獲得することを目指した点である。三点目は、本プロジェクトは学生が図書館職員や教員、そしてシンポジウムのゲストスピーカー等と協働して実践することで、複雑なネットワークの中で、マネジメントスキル並びに自律性を磨く点である。四点目は、教員主導の座学では経験できない積極的な学びを学生が経験し、困難なタスクをやりきるこ

で、自らの成長を実感できる点である。

プロジェクトの具体的内容は2つのキーワードから成る。1つ目は北米研究、2つ目はエンパワーメントである。後者のキーワードは、地域研究の枠を超え、各授業実践を結ぶテーマとなっている。この両者を扱う研究として、英語文化学科のウォント盛ゼミの学生が日本人戦争花嫁、多文化コミュニケーション学科の岩崎ゼミの学生が北米先住民のメイティ族の女性をテーマとしている。加えて、多文化コミュニケーション学科の木下ゼミでは、子育て支援をテーマにワークショップを企画・運営した。日本とフランスを取り扱う点で北米とは地域性が異なるが、身近な事例を通じて「女性たち」と「エンパワーメント」の場を作り出そうとする実践的アプローチを共有している。必ずしも女性だけが子育てを担うわけではないが、現実的には女性が多い。加えて、日本では児童のいる世帯は全世帯に占める割合で見ると20年前に比べて20%程度減少し、現在進行形の子育てを共有する人たちはマジョリティではなくなっている(厚生労働省2019)。つまり、だれもが共有可能な経験とは言えないものなのだ。そこで、伝えなければ分からない経験を共有可能にする表現によるエンパワーメントを共通のアプローチとして持つ主体を扱う三つのゼミが集まり、これまでに蓄積された実践を、「北米に生きるマイノリティ女性たち：先住民女性、そして日本人花嫁」と題したアカデミック・イベントの開催を目指して各自が活動を継続することが目的である。

イベントを通じて、学生に特に学び取ってほしかったものは、北米のマイノリティ女性たちの生き方から、学生が生きていくための知恵とレジリエンス(抗い乗り越える力)を得ることである。北米大陸(カナダ・アメリカ合衆国)は、元来先住民の暮らす大地であったが、ヨーロッパからの白人の入植以来、先住民や、白人の労働力として移民した人々は、社会的マイノリティとして社会の周縁に追いやられた。特にマイノリティの女性は、白人社会で差別的扱いを受けるだけでなく、自らのコミュニティでも女性として差別を受けることがあり、人種的・性的マイノリティとして、二重に苦しんできた。学生には、メイティ族の女性や日本人戦争花嫁たちが社会の抑圧に耐えるだけでなく、不当な社会構造に抵抗もしてきた、その力強さを学びとることで、自らの生きる力の向上(=エンパワーメント)を身に付けてもらいたいというのが、教職員側の意図であった。そして、もっとも学生たちが困難を感じるのが、取り組みをやり遂げることであり、学びを通じて理解した内容を第三者に伝えるように書くことである。そうした活動の中で、本プロジェクトのテーマとして取り上げる人々と同じ営み、つまり表現の重要性を発見できるのかどうか、自己と向き合う思考を求めた。

イベントは図書展、国際シンポジウム、ワークショップから構成されており、図書展は、10月21日から26日にかけて6日間行った。この図書展は、本学図書館が毎年開催している貴重書展との同時開催という形を取らせていただいた。国際シンポジウムとワークショップは、10月26日に開催した。

プロジェクトに関する第一回目となる本報告では、アカデミック・イベントに至るまでの、各ゼミでの学生の学習取り組みについて説明し、学生が何を学び、学びの過程でどのような課題が生じたか、質的分析の観点から述べていく。また、プロジェクト・マネジメント全体としての成果と課題についても述べる。尚、プロジェクトに関する第二回目の報告では、アカデミック・イベント後の学生の学びの理解度について、学生にイベント開始時と、終了後に行う予定のアンケートの分析を通じて量的分析を行った結果について述べていく予定である。

各ゼミの取り組みの成果と課題

〈ウォント盛ゼミ〉

ウォント盛ゼミは、1年生25名、3年生21名、4年生16名から構成されている。プロジェクトの取り組みは、各ゼミで行った。1年生の基礎セミナーの目標である、大学で学んでいく上で必要な基礎的学習スキル(論文を読み、読んだ内容を第三者にとってわかりやすい表現で要約する)、そしてアメリカ・マイノリティ文化に関する文献を読むことで、アメリカの多様性を知ると共に、論理的、批判的、多角的思考を養う、という教育目標に沿う形で実施した。また、英語文化学科の学生のゼミのため、比較的読み易い、英語の原文に触れる機会も創設した。

以上の教育目標を基に行った実施内容は、日本人戦争花嫁19名にインタビューした内容をまとめた、*Japanese War Brides in America: An Oral History*の翻訳を行うというものであった。戦争花嫁とは、1945年の日本敗戦と共

に開始された占領時に、進駐軍兵士（主にアメリカ軍兵士とオーストラリア軍兵士）と結婚して渡米・渡豪した日本人女性たちを指す。このテキストを選んだ理由としては、英語の難度が低いこと、また、インタビュー内容が、学生と同じ20歳前後に渡米した日本人女性のライフ・ヒストリーのため、学生が感情移入しやすく、理解しやすいと想定したからである。

25名の学生を2-3名から成る10のチームに分けた。入学時に学生が受けた、英語テストのスコアを参考に、各チームの学生の英語力が均一になるように編成した。学生は4月中旬から6月一杯にかけて、およそ10ページにわたるインタビューを、チームメンバーと翻訳した。日本人英語学習者用に編集されたテキストではなく、英語話者のために作られた本を読むことに、プロジェクトについて発表した時、多くの学生は驚いていたが、実際読みだしてみると、意外と訳すことができたという声を聞くことができた。

訳が終わった後は、内容を400字で要約する作業に進んだ。図書展で、第三者が読むことを意識して要約するよう学生に伝えた。敗戦の日本を生き抜き、敵国であったアメリカやオーストラリアで辛酸をなめながらも、草の根親善大使と呼ばれるまでに、移り住んだ国に遅しく根付き、文化交流等に貢献した日本人花嫁の人生を400字でまとめるのは、学生にとって難しい作業のようであった。しかし、それは学生が戦争花嫁の人生を理解したからこそ感じる難しさであったので、学生それぞれが、原文を理解している様子が伺えた。

1年生の作業においては以上のように、英語の原文をチームで読み、要約するという初年度教育の目的はある程度達成できた。6月末を翻訳・要約の期限として設定したが、10チーム中期限までに終えられなかったチームが二つあり、タイムマネジメントという課題が残った。

3年生の研究セミナーの目標は、4年次の卒業研究に向け、事象に関する複雑性を理解するため、各種理論（ジェンダー論、批判的人種論等）を取り入れた学術論文の読み方や、書き方等について学んでいくことである。この目標の達成のために、日本人戦争花嫁に関する論文4本を準備した。論文は、安富成良の「占領下の日本と進駐軍」と「アメリカの戦争花嫁へのまなざし」、ベリナ・ハス・ヒューストンの「民間親善大使：アメリカの日本人戦争花嫁」、Phung Suの「War Brides Act」である。これら論文を読むことで、学生がジェンダーの視点から、日本の敗戦と進駐軍占領、そしてそれがどのように日本人戦争花嫁とかかわっているのか理解することが学習の狙いであった。

学生は、4グループに分かれて、論文を各グループ1本ずつ読み、その論文に関するパネルを4枚作成した。学術論文を読むことで、日本人戦争花嫁を理解するためには、歴史、政治、ジェンダーといった様々な要因が絡まっていることを示すことで、研究セミナーの目的である、事象の複雑性を学ぶ機会を学生に提供した。学生の理解度については、第2回論文で報告する。

3年生の課題としては、論文を読んだ後に、理解した内容をポスターに落とし込んでいく作業で、第三者が理解できるように、簡潔かつ詳細に書いていくという作業に、どの学生グループも苦戦した。ポスターとして印刷を行うまでに、5-6回書き直しをどのグループも行った。しかし、推敲という作業は卒業論文を書いていく上では必要不可欠な作業のため、ゼミの目標である、論文記述の初歩的経験を学生は持てたと思う。

〈岩崎ゼミ〉

岩崎ゼミでは、1年生ゼミ「基礎演習」に所属する13名、3年生ゼミ「制作演習」に所属する10名が本プロジェクトに取り組んだ。多文化コミュニケーション学科の学びの支柱の一つである英語学習の一環として、英語の文献や資料を読み日本語に翻訳する練習を行った。さらに3年については、卒業研究の完成に向け英語で読んだ内容を整理してまとめ、第三者に適切に伝える訓練を行うことも目指した。

1年生ゼミでは学生を3つのグループに分け、入門的に比較的読み易い英語に触れる機会を与える目的で、以下の三作の翻訳を行い、ゼミ内で成果を共有した。

- ①今回のプロジェクトと並行して開催される図書館貴重書展「I am a Book：ほんが本になるまでの物語」で展示する「ちりめん本」の一冊 *Nezumi no yomeiri* (ねずみのよめいり)。なお、ちりめん本とは明治時代に在日外国人が日本のお伽噺等を翻訳し、日本人絵師が挿絵を描いたものを印刷した和紙を、縮緬(ちりめん)状に加工し和綴じにした書物のことをいう。
- ②当初本プロジェクトのゲストに予定されていた(健康上の問題により来日中止)先住民の著名作家マリ

ア・キャンベル (Maria Campbell) の著作 *Little Badger and the Fire Spirit* (小さなアナグマと火の精)。

③同じくキャンベル著 *People of the Buffalo: How the Plains Indians Lived* (バッファローの民—平原インディアンのくらし)

特に②と③については、1年生が本プロジェクトの主題の一つである北米先住民の文化をあらかじめ学ぶことで、プロジェクト最終日参加の際の内容理解を助ける意図もあった。

1年生ゼミでは4月中旬から10月初旬にかけて上記の作業を行い、9月末を翻訳完成の期限に設定した。しかし夏休みを挟んだため作業がその間滞り、期限までに作業を終えられなかったチームが一つだけあった。このためプロジェクト最終日の1週間前によく全ての翻訳の完成をみたことが、反省点として残る。

3年生ゼミについては、プロジェクト最終日に運営に携わり、司会、あるいはゲストとのダイアログにおける登壇者として参加する学生もいるため、予め北米先住民の歴史や文化について十分に理解を深めておくことが狙いとしてあった。さらに、4年生まで取り組む卒業研究の予行演習として、ある程度専門的な文献を読み、そこから得た知見を適切にまとめる手法を学ぶことも、もうひとつの目標として設定した。

このため、学生をカナダの先住民(女性)の歴史と文化に取り組む2つのグループに分け、英語および邦語の専門的な文献(詳しくは参考文献参照)を読み、わかりやすくまとめたパネルを各グループ2枚ずつ、計4枚作成した。そしてその後、木下ゼミ3年生、岩崎ゼミ1年生、ウォント盛ゼミ3年生との合同ゼミでパネルを用いてレクチャーし、質疑応答にも応じた。

3年生についても1年生と同様に、夏休みを挟んだため、パネルの完成がプロジェクト最終日の2週間前になってしまったことが反省点として残る。

(木下ゼミ)

共通のキーワードとの関連について

木下ゼミは1年生14名、3年生前期4名・後期5名、4年生7名で構成されている。本プロジェクトの取り組みには3年生が中心となって関わり、他の学年はシンポジウムへの参加を通じて、成果報告の評価者としての役割を担う。

3年生のゼミ活動の目標は、岩崎・ウォント盛ゼミとの共通項である「エンパワーメント」をキーワードにしたワークショップの実施である。その活動は多文化コミュニケーション学科の必修科目である「制作演習Ⅰ」および「制作演習Ⅱ」を通じて運営されている。本活動は、2014年度からフランスで行われてきたアクション・リサーチ、地域の住民・親・職員らによる子育てのエンパワーメントに日本側から参加してきたものを引き継いだものである。2016年度以降、本学学生たちがファシリテーターとなり、兵庫県東灘区のNPO法人子育て支援ネットワークあいの協力のもとワークショップを企画・実施している活動である。2019年度はフランス側の取り組みの完成年度になることなることに合わせ、本ゼミでも子育てに関する日仏の親たちの想いを冊子にまとめ、2019年10月26日に開催のアカデミック・イベントで活動報告をすることを目標としている。

子育て世帯の子育てへの想いは様々であることは想像に難くない。しかし、現在、児童のいる世帯は日本社会においては多数派ではなくなり、子育て経験者の子育ては現在のものではないため、共有することは難しい。さらには、共有することは当事者にとってさして期待されていないかもしれない。しかし、必ず子育ては社会政策として、子育て支援として外部から干渉され続ける。干渉されるにも拘わらず、政策的にみると社会的共通理解や支援が不足し、仕事と子育てを両立することの容易ではない状態が続いている。このことは、当事者以外に当事者の思いが知られていないことに要因があるのかもしれない。他方、本活動の比較対象であるフランスでも、日本に比べればその程度は小さいが、現在進行形の子育て世帯の割合は減少傾向にある。しかし、その政策的な位置づけを関連づけて検討してみると、日本とは事情は大きく異なることが分かる。フランスでは人口政策として歴史的に進展してきた家族政策は児童のいる世帯への金銭的給付や時間の面から支援を拡充してきた。その違いによって、子育て世帯の子育てへの思いは異なるだろうか。そして、子育てをオープンに語ることは可能なのだろうか。表現というエンパワーメントを促す活動としてワークショップを運営し、その中で自分たちの表現力も向上させることはできたのだろうか。

学生の取組みについて

さて、このような目標を立て、木下ゼミ3年生はどのような活動をし、その活動の中から課題を見出すことができたのであろうか。ゼミでは、2019年7月23日のWSおよび10月26日のプロジェクトイベントでのプレゼンテーションにむけた確認と作業である。岩崎ゼミとはその進捗状況を共有するとともにそれぞれの制作物の完成にむけ、評価と改善点の確認のために7月11日に合同ゼミを開催した。

合同ゼミについて

合同ゼミではプレゼン大会を行った。14名の学生（岩崎ゼミ10名、木下ゼミ4名）が、3つのグループに分かれ、プレゼン5分、質疑応答5分として、すべての人が他のグループの報告を聞くように順次席を移動し、プレゼン担当は計4回行った（写真1）。

木下ゼミ学生の報告内容は、WSを企画した背景、目的、方法、言葉の定義および作業内容である。プレゼンを聞く側にはタスクシートが配布され、報告側の研究・作業目的、問題意識、キーワード、報告からわかったこと、相手へのコメントを記入することになっている。さらに、授業後に自己評価アンケートを実施した。自己評価アンケートをみると、他ゼミの内容に対する関心が喚起されるとともに、報告の作法の違いから、自分たちの問題点を感じるとることができたようである。また、初めての合同ゼミであったことに対する不安や思いもよらない質問に対する大変さが述べられ、予見できないことに出会った驚きがあったようである。予見できないことに対して、なぜ、何が難しかったのか、について述べておらず、より詳細に思いや状況を述べることは習慣化されていない様子が伺える。同様に、相手に伝えることや理解してもらうことへの戸惑いが述べられていることから、共有していない情報や状況を相手に伝えることに工夫が必要である点に気付くことができた。自分の作業についての感想欄には、伝える作業の拙さやそのための知識の重要性を再確認している姿が伺えた。



写真1 合同ゼミの様子

WSについて

これまでのWSでは内容を分割して実施してきた作業を1回きりで完了させる必要があった。1回のWSのなかで、「言葉を集める」目的を兼ねた作業と導入としてのフランス人との交流を行うことが求められた。「言葉を集める」ために、フランス側との共通のキーワードであり、交流の材料である「言葉で表現する」作業には事前準備が必要である。フランスでは参加者自身が行うが、日本側は実施が1回きりであることを理由に、フランス側が言葉から見出した4つの軸、「価値」「定義」「子どもにとっての実践」「親にとっての実践」の4つの軸にそって、ワークショップの前に、学生達が分類をした。さらに、フランス側と同じく、その4つの軸に分けた言葉をそのグループの中で、KJ法によりさらに整理し、名札をつけている（写真2）。これまでに収集した言葉はカードに書かれており、そのカードの裏には親たちによる説明書きがあるため、その内容にそって言葉を4つの軸に分類している。作業は2段階に分かれ、最初に、ゼミ全体での作業に先立ち1名の学生自身が、教員のサポートのもと事前分類し、後日行われたゼミ内にて、学生全員のみで検討し直しながら、整理した。フランスでは言葉の力を高め、参加者同士の交流を深めるために親たちが行う作業であるが、日本では親たちに同様のニーズがあるわけではなく、グローバルに限らず、カリキュラムポリシーである「異なる考え方」を理解するための実践として、学生たちが、集めた他者の言葉を丁寧に理解し、情報を整理する作業を行った。



写真2 作業途中の様子

- 1 フランス側の作業の結果はフランス語で説明と共に送られている。分類作業を担当した学生はフランス語履修者ではないため、教員が内容を翻訳・説明するためのサポートを行った。

WS では、その言葉のグループにあるカードを親たちに渡し、「子どもにとっての成功とは何か」についての想いを文にして書いてもらうことにした。その際、学生たちが各作業グループに入り、これまでに収集した言葉を紹介し、参加者が言葉を付け加えながら文を作り出すことを中心的に行うことであった。

当日の実施を控え、学生 O さんがプレテストを行い、子育て中の本学教員に協力を依頼し、実際にカードを使って文の作成を実施している。

3 年生ゼミ数は 4 名であることから、ゼミ全体での活動を円滑に行うための、こうした事前準備は各自がそれぞれの責任者となり、全体で Moodle をつかって情報共有を行っている。主な内容は以下である。

ゼミ代表 O さん	フランス語関連作業責任者、WS 進行責任者
K さん	チラシ原案、アンケート作成、マラカス制作責任者
Y さん	カード作成と分類、WS 物品リスト作成責任者
S さん	道具運搬、受付表作成と管理責任者

WS 当日の参加者は親御さんが 15 名、子育て支援ネットワーク職員 2 名、木下 3 年生ゼミ学生 4 名、本学学生参加希望者 1 名、本学教員 1 名、マルティニーク県学生 5 名、Jimage 職員 2 名、他の NPO 団体からの見学者 1 名である。

WS 実施の結果、学生たちの自分たちへの評価は以下である。評価される点として、1. フランス語ゼミである自分たちの強みを活用した遊びや歌を紹介し、参加者との交流が可能となったこと 2. マルティニーク県の学生だけではなく、学生全てが参加者の親子と交流できた点が挙げられている。その点は、参加者の意見からも聞かれ、「フランスの学生との交流」や「フランス語であいさつ」できたことに満足感を得たり、「学生の皆さんから教えてもらうことがほほえましかった」といったコメントや学生の個人名を挙げながらお礼が書かれていた。一方、検討すべき点として、1. 進行方法と内容に対する予見 2. 説明の仕方と十分さ 3. 参加者の観察と受け入れ・対応方法 4. 協力学生との連携 に分類される。参加者たちからも同様の意見が聞かれ、「何を学んでいる学生なのかよくわからなかった」、「WS の目的が分かりにくい」と指摘された。

プロジェクト・マネジメントの成果と課題

本プロジェクトは、冒頭でも述べたように、英語文化学科 1 ゼミ、多文化コミュニケーション学科 2 ゼミ、図書館が共同で始めた事業である。プロジェクトを推し進めていく中で、構成教職員の間で 2019 年 3 月から 10 月にかけて 2 回の打ち合わせを行ったほか、メールによる進捗状況の報告、相談はほぼ毎週行われていた。コミュニケーションが密にとれたことで、教職員間で迅速に問題が共有されたため、問題解決がスムーズにできた。また、密なコミュニケーションの中から、プロジェクトをより豊かにするための提案が次々と各教職員から出されたのが、成果であるといえる。

成果の一つとしては、アカデミック・イベントを行うに当たって、共催として、カナダ大使館と本学教育イノベーション・プロジェクトに採択された「甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト」に共催の賛同を得たことである。また、イベント中に、生活環境学科ならびに日本語日本文化学科原良枝先生の「視聴覚コミュニケーション演習 II」の学生のイベント参加が実現した。原先生の学生は、図書展のインタビューをしに来てくれた。原先生授業の参加によって、学生間の交流にさらにダイナミックが生じ、本プロジェクトの学科・組織横断型という目的がさらに充実した。

また、組織レベルでも、図書館との協働が当初の予定であったが、こちらもプロジェクト参加教職員の提案で、広報課、IT・管財課の職員からの支援も受けられることとなった。具体的には、広報課が毎年発行している卒業生向けの「甲南女子大学レター」への広報掲載やプレスリリースである。IT・管財課からは 10 月 26 日のワークショップ時の撮影協力をしていただいた。

プログラム起ち上げ当初の 3 学科、1 組織以外の方々の参加が以上のように、プログラムが進む中で増殖していき、学科・組織横断型を目指すプログラムとしてより豊かになっていった点が、大きな成果であった。一方で

課題としては、マネジメント部分にも学生を積極的に関与させたかったが、イベント準備に時間がとられ、その部分への参画が十分にできなかった点である。

ま と め

本報告では、イベントに至るまでの成果と課題について述べた。木下ゼミと岩崎ゼミの3年合同ゼミおよび1年合同ゼミの実施（前期）、1年合同ゼミへのウォント盛ゼミ3年生および岩崎ゼミ3年生の参加（後期）といった形で学科横断型の学びができた。一方で、各ゼミで課題も浮かび上がった。

ウォント盛ゼミは、1年生、3年生各ゼミでマイノリティ女性について学ぶことで、各年度のゼミ目標をある程度達成したものの、タイムマネジメントで課題が残った。

岩崎1年生、3年生ゼミでは、英語文献の翻訳・読解や、カナダ先住民（女性）の歴史や文化という、これまで学生には全く馴染みの薄かったことに協力して積極的に取り組み、学んだことを同級生や下級生に伝える作業まで完遂できたことが、大きな成果であった。しかし翻訳およびパネルの完成を見たのがプロジェクトの約1~2週間であったことから、当ゼミでもタイムマネジメントが今回の最も大きな課題として残されたといえる。

木下ゼミは、アカデミックプロジェクトへの参加を通じたWS継続とその過程で合同ゼミを実施してきた。各活動後のアンケートから分かるのは、伝えることの難しさに気づき、その点をいかに克服するかについて意識し始めていることである。この表現する力という極めて原初的だが繰り返し述べられる重要性を学科・組織横断型活動といかに有機的に結び付けられるのかが今後の課題である。

以上の課題を踏まえつつ、今回は、イベント実施後の学生の学びの発展や意識の変容に関して、アンケートや授業での振り返りを通じて検証していく。

参 考 文 献

浅井晃『カナダ先住民の世界－インディアン・イヌイト・メティスを知る』（彩流社、2004年）

岩間暁子、ユ・ヒョジョン編著『マイノリティとは何か』ミネルヴァ書房、2007年

木村和男編『新版世界各国史23 カナダ史』（山川出版社、1999年）

京都外国語大学『文明開化期のちりめん本と浮世絵』

<http://www.kufs.ac.jp/toshokan/b:ibl/bibl176/pdf/17613.pdf> (accessed Oct. 11, 2019)

富田虎男、スチュアートヘンリ編『講座世界の先住民族－ファースト・ピープルの現在－07 北米』（明石書店、2005年）

細川道久編著『エリア・スタディーズ156〈ヒストリー〉カナダの歴史を知るための50章』（明石書店、2017年）

安富成良、「占領下の日本と進駐軍」『アメリカに渡った戦争花嫁：日米国際結婚パイオニアの記録』。安富成良、スタウト梅津和子編著、東京、明石書店、2005、11-39

———「アメリカの戦争花嫁へのまなざし：創出される表象をめぐる」、『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道：女性移民史の発掘』、島田法子編著、東京、明石書店、2009、151-183

ベリナ・ハス・ヒューストン、「民間親善大使：アメリカの日本人戦争花嫁」、『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道：女性移民史の発掘』、島田法子編著、東京、明石書店、2009、184-215

Barkwell, Lawrence, Leah M. Dorion, and Audreen Hourie, eds. *Metis Legacy II*. Saskatoon: Gabriel Dumont Institution and Pemican Publications, 2006.

Canadian Geographic. *Indigenous Peoples Atlas of Canada: First Nations*. Ottawa: The Royal Canadian Geographic Society, 2018.

——— *Indigenous Peoples Atlas of Canada: Inuit*. Ottawa: The Royal Canadian Geographic Society, 2018.

——— *Indigenous Peoples Atlas of Canada: Métis*. Ottawa: The Royal Canadian Geographic Society, 2018.

Campbell, Maria. *Little Badger and the Fire Spirit*. Toronto: McClelland & Stewart, 1980.

——— *People of the Buffalo: How the Plains Indians Lived*. Vancouver: Douglas and McIntyre, 2013.

Crawford, Miki Ward, Katie Kaori Hayashi, and Shizuko Suenaga. *Japanese War Brides in America: An Oral History*. Santa Barbara, Praeger, 2010.

Phung Su. "War Brides Act." *Asian American Society: An Encyclopedia*. Ed. By Mary Yu Danico. Los Angeles: Sage, 2014. 945-947.